

平成7年度
病害虫発生予察特殊報(第3号)

平成7年9月27日
東京都病害虫防除所

病害虫名 : リンゴ葉腐病(仮称)

病原菌: *Rhizoctonia solani* kuhn 菌糸融合群AG-1、培養型IB

1. 発生経過

平成7年6月、南多摩の一部のリンゴ園において、未知の葉腐れ症状が発生し、6～7月の長雨により激しい被害となった。その後、8月の高温乾燥により病勢は押さえられている。また、9月には同様の症状が西多摩の一部のリンゴ園でも認められた。本病の発生が確認された品種は千秋、陽光、新世界、北斗、紅玉、ふじ、ひめかみ、ニュージョナゴールドであった。

罹病部から分離された*Rhizoctonia solani*を健全なリンゴ苗に接種したところ、本症状が再現し、接種菌が再分離されたため、同菌による病害であることがあきらかとなった。本病は進展が速いことから、今後の蔓延に注意する必要がある。

2. 病徴

はじめ葉に暗緑色、水浸状の不整形病斑を形成、多湿時には急速に拡大して葉腐れとなる(写真1、2)。罹病部には白色～褐色の菌糸が豊富に生じ、隣接葉や枝上を速やかに伸長し蔓延する。このため罹病葉は菌糸により綴合わされ、あるいは枝に巻き付け、脱落せずに枝に貼り付いていることが多い。罹病部には菌糸の他、淡褐色～褐色の菌糸塊及び菌核を形成する。

発生は下部や中間部の枝葉に多いが、樹全体に認められる。

3. 診断方法

病勢が進展すると特徴的な症状及び菌体(菌糸、菌核)から診断は容易である。しかし、初期には菌糸の発生が少ないので、病斑部を顕微鏡観察し、菌糸の特徴を確認する必要がある。また本病原菌は菌糸伸長が速く、素寒天培地で分離すると1～2日で確認できる。

4. 防除方法

(1) 罹病葉枝の除去

病原菌は8月の乾燥時にも菌糸、菌糸塊、菌核などで罹病部で生存可能で、乾燥した被害葉からでも多湿状態にすると速やかな菌糸伸長が再開される。このため今後降雨が続けば梅雨期の罹病部から再び被害が拡大する恐れがあり、地面及び樹上の罹病葉枝の除去を徹底して行う。

(2) 薬剤防除

本病の薬剤試験については未検討であるが、リンゴに他病害で登録があるTPNフロアブルやイプロジオン水和剤などの散布には効果が期待できる。

リンゴ葉腐病(仮称)の病徴及び標徴

リンゴ葉腐病(仮称)の病徴及び標徴



写真1：発生は下部に多いが、樹全体に認められる(矢印)。



写真2：水浸状の病斑と緩られた罹病葉及び罹病葉の表面に形成された菌核(矢印)。